
一部50円です



地域の力

私は今、久々の高揚感を感じています。それは「芥川村・SHOPマップ」をつくる為に芥川界隈にある約130店舗を訪ね、期待通りの反響を受けたからです。

長い不景気で商店街の景気も意気も下がりばっなし、組合理事の顔ぶれもマンネリ化し、あまりヤル気を起こせる状態ではなく、そういう私も『芥川だより』で手一杯、誰か何かしたらいいやろ、という無責任な思いだった。

こんな気持ちじゃいかん！と思ったのは、東日本の被災地の商売人のニュースである。津波で店を失った店主が店のあったところで再開を決断、行政なんか待ってられないと熱く語る姿、福島原発事故の影響で傾きだした会社の経営者がどうにかして再開したいと奮闘する姿をみて、大事なものは気持ちだ、根性だ、と気づいた。

前から関心があった地域マップを、理事会で提案したところ皆さんの賛同を得て、組合の事業としてとりあげてもらった。私は、すぐに「みんなで作ろう。芥川村・SHOPマップ」というチラシをつくり各店をまわった。

芥川という町は「村」に近い人情味ある人々が住み、建物や町並みも昭和の良き時代をかもしよう風情がある。その中に点々とする店も、同様に少し昔にタイムスリップしたような、ゆっくりとした時間を提供してくれる。「隠れ家、寄り道、回り道、こっそり感」そんなキーワードが似合う「村」です。

周辺の裏道や路地裏にある店の魅力を集めて発信する事例は全国的に増える傾向にあり、小さな隠れ家のような店があることによって、多様な人が集まり、その口コミでまた人が来る。いろいろ雑多な人々が出会い触れ合う場が新しい文化を生み、その客を狙って新たな店が出来てくる。たがいの店が影響しあい、何かがいとも発酵してブツブツ湧き出てくるような、そんなワクワク感のある地域になれば、商店街という枠を超えたつながりが出来、面白いゾーンになるのではないだろうか。そのきっかけに、この地図がなれば嬉しい、と思ったのである。

この企画をもって訪ね歩くと、初めて会った多くの人から、「面白そうや、うちも載せて」という熱い思いを強く感じた。人・町並み・店という点が集まり線になり、その線がいくつもできる事でゾーンになっていく「地域」の力を芥川に期待したい。(嘉)

連載 爺捨て山 30

梵店主

以前、この欄で紹介したKさんが米寿を迎えるにあたって、大きな計画を立てられましたので、掲載します。

米寿の挑戦

天保山(8月12日)から

480キロ(15日間)歩き

富士山(8月28日)に登ります。

ご声援をお願いします。

〒569・1085 42

高槻市南平台2丁目8番6号

戸田 巽

私も山歩きをしてきましたが、今は一日たりとも戸田さんについて歩く事は出来なと思います。情けない話ですが、ほんとうです。それだけに、戸田さんの情熱に敬意を持って応援したいのです。

無事、富士山に登って欲しいです。どうか皆さん、戸田さんにエネルギーを送ってあげて下さい。ハガキに頑張れと書いて投函して下さい。

きっと皆さんの声援が後押しして、苦しい一歩を少しでも軽く歩けるようになると思います。

どうぞご声援をお願いします。

ガルムツシユ峰 ⑭

梵店主

40歳のザイルが残り少なくなつたので、よっちゃんは、大きな声で「ザイルあと5m」と叫んだ。岩峰で由べえの姿は見えないが、声は届くはずである。吹雪や風が強い時は、届かないが今日は天気が良いから大丈夫である。

しばらくして「確保ビレーを取りました」と由べえから返事が返ってきたので、よっちゃんは、ザイル確保の姿勢を解き自分が登る準備をした。

直ぐに「登って来て下さい」と大きな由べえの声がしたので、よっちゃんは、行動を開始した。

急で狭いルンゼに下降する。風雪にさらされて出来た凹角は岩肌石ころが所々たまり雪氷が覆っている箇所もある。ルートは、ルンゼの中央へトラバースして直登するようだ。よっちゃんは、由べえが歩いたと思える小さな岩角にアイゼンの爪を慎重にのせて横断する。下を見れば、遙か下の氷河まで切れ落ちていいる。少しのミスが命取りになりかねない箇所だ。やっこの思いで、よっちゃんはルンゼの真中まで、トラバースして上を見上げた。

岩に隠れて見えなかつたルンゼの上部は、大きな岩や小さな石などが塊となつていた。ザイルが少し引つかかるだけでも落石を起す落石の巢みたいなのルートである。

昨日、ルート工作した山猿が言っていた。「落石が鉄砲玉のように飛んでくるから、いつも上をよく見ていて、石が飛んでくる方向を見定めて避けなあかん。下向いて避けたんでは当たると」

よっちゃんは、金が無かつたので岩登り専用のヘルメットが買えず、バイクに乗るとき使っていた安物であつたので、石が当たれば貫通するのではないかと思つたが、運を天に任せて登る事にした。

由べえが確保してくれてるザイルが岩と触れると幾つもの石が落下してくる。ピューピューと音を立ててくる。避けたくても避けようがないから、急いで登る。よっちゃんはより下には、誰もいないからいくら落石を落としてもかまわないが、固定ロープを張っているから、ロープを傷つける可能性があるから、出来るだけ落石はしないように気をつけた。

酸素が少なく息が激しいが、落石で死ぬのは避けたいから、頑張つて由べえの処まで登つた。

由べえが、よっちゃんに「落石が凄かつたでしょう。あんなのに当たつたらイチコロですよ」という。「ほんまや、えらいとこやな」とよっちゃんは返事した。

「その大きな石に触つてはダメですよ。浮石やから」

「ほんまか、こんな大きな岩が浮石とは」

「さつき、触つたら動くんですよ。びつくりして、離れました。こんなのが落ちたらどうしようもない」

よっちゃんの身の丈もあるような、大きな岩は少し触るだけで動くのである。間違つてこんな岩にハーケンを打つていたら、どうなつていたことか。

ここが、昨日の工作隊が到達した最高地点である。これからは、また未知の岩稜がはじまる。よっちゃんは、トップの交代を考えたが、由べえは、いつもより元氣そうに見えたので、続いてトップで登つてもらおう、と思つた。

厳しいルートをトップで登るとセカンドで登るのでは、まるで違う。セカンドは落石にさえ注意すれば、ザイルでトップが確保してくれているから、死ぬ事は少ないが、トップは危険な役である。ザイルを支えるハーケンを多く打つとザイルの滑りが悪くなり、かえつて登りにくくなるので、バランスよく打つことになる。間隔があき過ぎると落下した時の衝撃が大きくなり、ハーケンが抜ける可能性が高くなる。

初登攀の難しさは登つた者でなければわからないが、それだけ喜びも大きいというわけである。命を掛けた自己満足の極致と言えるかも知れない。

義兄とその家族 (18)

いまだきガンは治る病気なのだ、と思いたい。義理の兄が最初に「胸が痛い」と言い出したのが2年前の7月だったと姉から聞いている。肺ガン宣告から2年経つたということになる。

姉は私に「医者から、一巻の終わりみたいな言い方されて、『もうアカンのか』と思つたけど、まあ何とか2年、生き延びたし、これからは一喜一憂せんことと思つてんねん」と言つた。悟つたような言い方だが、ウチの姉の場合、コロコロ考えが変わるので、油断はできない。

なぜなら、その言葉の続きに、「最近、喰いつきが悪いから、ちよつと具合、悪いんちゃうかと思うねん……」と「一憂」している。

喰いつきつて、犬やライオンではないんだから、普通に「食べっぷり」と言つてほしいが、姉は「(義兄の)喰いつきで、どれぐらい体調がええか悪いかかわかるんですわ」と言う。

私もひとのことは言えないのだが、姉は言葉遣いを知らない。というか、言葉の間違つて覚えて、平気で使う。「まんじりともしない」というのは、「一睡もしない」という意味だと思つたが、姉は「(義兄が)まんじりともしないで、待

「ってんやんか」と言うので、「えーっ、

寝んと待つてはったん？」と聞くと、「い

や、ぐっすり寝てたよ」と言う。どっち

やねん！と思うが、多分、姉の辞書の「ま

んじりともしない」は「ずうっと、気に

かけて」というような意味であるらしい。

父の葬儀の時、「このたびは……」と言う

のは、弔問客の方だと言うが、姉は「わ

ざわざありがとうございます」と言う前

に、「このたびは……ムニヤムニヤムニヤ

と頭を下げて、相手の人をたじろがせて

いた。

確かに、「食べっぷり」というより「喰

いつき」という方が、食への積極性が感

じられるが、食べ盛りの中学生の話では

なく、食の細い、病人の話なのだから「違

和感あるわあ」と思ってしまう。でも、

いちいち指摘はしない。姉の場合、一つ

ひとつ指摘していたらキリがないのと、

言うともムツとされるからだ。

「喰いつき」が悪くなっているという

義兄は、毎月のように森ノ宮の成人病セ

ンターに通って、血液検査や「骨の注射

をしてもらっているのだそうだが、「骨の

注射って何？」と姉に聞いても「知らん

ねんやん」という返事しか返ってこない。

何回も何回も、ここに書かせてもらっ

たが、姉は現代のガン治療にもすごい

不信感を抱いていて、「抗ガン剤のせい

で、血管をボロボロにされた」みたいな

ことを言い続けて、成人病センターの医

者を今もシカトしている。

向こうは姉のことなど気にもかけてくれ

ていないから（これは、当たり前だが）、

シカトといっても成立していないけれど、

「病院に行くたびに（義兄が）ブルーにな

って帰ってくるから、『半年ぐらい、来な

くていいですよ』と言うたってほしいわ」

と怒っている。

「だって、検査しても同じやろ。ここから

は、全身をよくしていくしかないねんか

ら」。

確かに、義兄は抗ガン剤だ、放射線だ、

という治療の時期は終わって、再発しない

ように免疫力を高めたり、血液をサラサラ

にするなどの日常のメンテナンスが大切

な時期にある。だが、それは家族の思いで、

医者は「再発する可能性が高いので、慎重

に見守りましょう」と義兄に伝えているよ

うだ。

姉は「ガンから心を離していかなアカン

のに、病院に行くたびに検査されるから、

その結果が出るまで気になって、心が離れ

へんやろ」と言う。

実は、私の姉は宗教ではないのだが、あ

る人の教えを絶対視していて、年に2、3

度開かれる2泊3日のセミナーにもう何

十年も参加し続けている。その教えは姉の

精神の拠りどころで、「心を離す」とか「意

識がどうのこうの……」というのは、そのセ

ミナーの主催者の受け売り、といって悪け

れば、影響だ。

ただ、その宗教もどきは、非常にビ

ューアで、お布施や寄付などのお金を集

めることを一切、しない。その教えの

先生は、セミナーの講師であり主催者

だが、自分と奥さんのセミナー参加費

をきっちり払うのだそうだ。「心の勉

強会」は、すべてボランティア。元、

大阪の有名高校の校長先生で、定年退

職後に、近所の奥さんたちを相手に話

し始め、その輪が広がって、ホテルで

セミナーが開かれるようになった。姉

は第一期生に近い「教え子」だ。姉

は妹思いだから、そのセミナーに何と

か私を参加させ、生きる意味を掘り下

げさせようとしていたが、私は辞退し

てきた。生きる意味は、やっぱり自分

で掘り下げたいし、集団で心のお勉強

など、恥ずかしい。

私以上に姉はそんなことがキラいな

はずだから意外なのだが、一旦、信じ

たらまつしぐら。

何年前か、先生が「パソコンをマス

ターしなさい。私の考えを伝えるから」

と言われ、姉は、突然、パソコンのス

クールに通い始め、たちまち先生のホ

ームページを開いて、読めるようにな

った。以来、毎朝のように6時前に起

きて、パソコンに向かっている。「そん

な時間帯しか、一人になられへんか

ら」。

「先生の本一冊あったら、私は離れ小

島でも生きていける」と言い、先生が「喫

煙者はセミナーに参加してはいけない」

というおふれを出してから、タバコも止

めた。これはスナリとはいかなくて、

奈良の方にある病院の禁煙外来に通って

ニコチンパッチを貼ってもらって、それ

でも止められなくて、2、3度、セミナ

ーに参加しなかったようだ。

「セミナーの間だけ吸わんといても、

先生はお見通しやから」とさびしそうに

言っていたが、とうとう、禁煙に成功し、

胸を張って行き出した。

禁煙のこともそうだが、先生は、心の

勉強の合間に、健康法などにも触れるら

しくて、あるときから姉はソックスを5

足ぐらい履いて歩くようになった。足を

冷さないように、と先生が言ったらしく

て、絹や木綿の靴下を重ねばきして、そ

のまま脱がずに履くために、やたら大き

な靴を買うようになった。靴といっても、

姉の場合は、スニーカーの類なのだが、

本来、足が小さくて、22・5センチサ

イズだったのに、24・5とか25センチ

のものを探して買っている。起き上がり

こぼしか、Donald Duckのようだが、

姉は「アンタも足、冷したらアカンで。

靴下履きや」とうるさい。

私は本能のままに、寒いときは履くし、

暑くなったら脱ぐ。

5足重ねばきのような、通常ならざるマ

ネはしない。なんぼ健康によくて、そ

麓を並べております。苦むした石垣は、

大小の自然石を殆ど加工しないで積んだものです。この土地の穴太の石工たちの特有な工法です。この穴太衆積みの風

雅な連なりに往時がしのべれます。

この広い参道を二、三町上ると比叡山

への表坂の登り口です。右手の赤い鳥居をくぐると日吉大社です。左へ迂回し、

比叡山高校の高い石垣沿いに尚も二、三町行くと坂本ケーブルの駅に至ります。

小さな駅舎は寒村のその如く雪を被って建っております。

古拙な待合室の古びた長椅子に僧形と老婆が対話しております。二十分程待ち、ケーブルカー独特の斜形の箱に乗り込みました。

昭和二年に開通したこのケーブルは、

渓谷を臨む尾根路を約二キロ、約十分で標高670メートルの中堂駅へ達します。

乗客は小生の他には先刻の待合室の二人だけでした。先頭部の運転台に中年の乗務員が退屈そうに立っております。

上の方でケーブルで引き上げているのでしようから、特に運転操作は必要ないのでしようね。何か異変があれば、電話で急報して停めてもらおうのでしようか。小生、このケーブルを乗る度に、こんなつまらぬ心配をしております。上昇と共に眼下に広がる琵琶湖の景観が楽しめます。

終点の中堂駅から切り通しのゆるやかな坂道が曲折して延暦寺の中心部へ通じます。相客の二人を先にやり過ぎし、積雪を踏み分けて歩みます。

左手は所々削られた山肌が迫り、右の方は谷を成し、底から杉などの巨木が競い合うように伸び上がっております。路肩の杉並木の枝葉から時折雪が静かに落ちてきます。

常緑樹の淡い緑色と、幹の処々にこびりついた雪の白さが、木洩れ日の中で斑模様になり、谷一杯に広がっております。

京子さんの、あの京鹿子のお召し物が、樹々の間に、天女の羽衣の如く舞っているようです。御両親はこの路を共に歩まれたのでしようか。

やがて山上の広場へ出ました。人影は無く、雪の上に数条の足跡が線描されております。左の広い坂の下に根本中堂の

大堂宇が雪化粧の杉木立ちに囲まれ寂然と建っております。仕事の時は前方の会館等を訪問するのですが、今日は坂を下ります。

根本中堂は正式には一条止観院と称し、比叡山延暦寺の中心を成す大伽藍で

比叡山

高井は、秋から冬にかけて仕事に忙殺された。狂騒の大阪万博が終わり、

世の中は何となく静かになったようだが、この時期、彼にとっては得意先の訪問数が多くなる。

年が変わって、二月、去年の嵐山の邂逅の日と同じ日に休みを取り、比叡山へ登った。その日の行程を、心の中で手紙に書いた。

里見京子さん、今日は一年前、貴女と嵐山でお会いした日です。貴女があらんなに望んでおられた比叡山へ、小生一人で登りました。

この季節、三条からの直通バスは、晴の日でも、比叡山ドライブウェイの積雪のため運休になることがあります。今日もそうでした。そんな日は三条京阪から電車で大津を経て坂本へ至ります。そこからケーブルで登ります。

坂本は大津市の北端を成し琵琶湖の西岸に沿うた町です。駅前から麓の方へゆるやかな上り道が通じます。比叡山の守護神として名高い日吉神社の参道でもあります。広い道の両脇に、延暦寺の里坊が、杉、桜、楓などの影に

んな窮屈な思いを足にさせたくない。

その「心の勉強会」に、休職中でヒマになった義兄も参加するようになった。

もう何回か、参加しているようだが、この6月にも2泊3日のセミナーに夫婦二人で行くからと、電話してきた。「義兄は」私に置いていかれるのがイヤなだけや。行ったら、セミナーに来て私の友達が『体調、どうです?』とか言うてチャホヤしてくれるしな。そういうところ、姉は結構、さめている。

セミナーに参加して、何か得るところがあるのか、義兄に聞いてみたいが、まだそのチャンスがない。(A.O.)

俳句

土田 裕

○ なほ奥へわれを誘うや滝の音

○ おだやかな午後を授かり百日紅

○ 風鈴の次の音を待つ夕座敷

○ 片影を伝い歩きす城下町

○ 新しき畳の匂ひ昼寝かな

晶男

○ 父祖の地の田植え叶わず避難せり



す。桁行百二十二尺、梁間七十八尺、軒高三十尺、棟高八十尺、実に堂々たる木造建築です。

単層入母屋造りの銅版葺の屋根を、延長三百尺の回廊の棚葺きの屋根が取り囲んでおります。華麗にして荘嚴です。

正面柱間十一間の中央に唐破風の門扉があります。中へ入ると前庭があり、左右の回廊から堂内へ通じます。

堂内は奥の内陣と外陣に分かれています。巨大な円柱が整然と並ぶ薄暗い外陣を進み入ります。

外陣の欄干の前に正座します。中央高く須弥壇に安置されている本尊薬師如来に合掌します。み仏の前の燈明が、開宗以来灯り続ける「不滅の法灯」です。

御両親は、ここで共に合掌されたのでしょうか。

全身が得体の知れぬ靈気の中に包まれているようです。内陣は低くなっており、石甃が敷き詰められています。

延暦寺開宗伝教大師最澄は、十四歳の時、近江国分寺で得度し、二十歳の時には、奈良東大寺戒壇院で受戒したのですが、直ぐに比叡山へ登り、独り草庵に篋り修行します。その時、決意を表した文章を書きました。

『願文』です。実に名文です。わずか二十歳の若者の文章とは思えません。小生、若い頃、これを読み感嘆しました。經典には全く蒙味の小学生ですが、本日

はこの文章をある本から筆写したものを懐中にして参りました。深遠なる文章を充分には理解しておりませんが、この『願文』を、み仏の御前にて、黙読し、祈りを捧げます。

「悠々たる三界、もつばら苦にして安きこと無く、擾々たる四生、唯患にして楽なし。牟尼の日久しく隠れて、慈尊の月未だ照らさず。三災の危きに近づき、五

獨の深きにしずむ。然のみならず、風命保ち難く、露體消え易し。艸堂楽なしと雖ども、而も老少白骨を散じ曝す。土室

開く狭しと雖ども、而も貴賤魂魄を争い宿す。彼を見、己を省みるに、この理必定せり。……」

高井は、延暦寺を詣でた翌日、退勤時、新京極裏のいつもの酒場での独酌の後、デミアンへ入った。すでに賑わっていた。カウンターの入り口側の椅子席に座つた。この席は彼の指定席のようになって

いる。久実は、よっぽど込まない限り空けておいてくれる。奥で接客していた久実が直ぐに寄ってきて彼のボトルを用意した。

「きのう、比叡山へ登ってきた」「そう、雪で大変だったでしょう」「坂本からケーブルで行ったが、上は積もっていた」「京子さんが望んでいた日だったわね」

久実は高井の前に満たしたグラスを置いた。

「キミも……」

「頂くわ……」

久実は高井のボトルで自分のものを作った。二人はグラスを軽く合わせた。

高井は、がぶっと一口飲んだ。久実は、少し味わった。

「名古屋へ帰る日は決まったのか」

「来月の末頃になるかしら、名古屋のお店から新しいママが来ることになって

いるから、そのあと……」

久実の母親は名古屋で一人で暮らしている。最近、体調がすぐれないので、

一人娘の久実に帰郷を懇願している。久実は、十二、三年前、結婚したが、直ぐに離縁した。知人の世話で名古屋のバー

で働くことになった。一年程して、そのバーのオーナーママが京都で新しい店

を開くことになり、久実は、請われてその新装のバー、デミアンの雇われママにな

った。高井は十年前程前、ある大学の先生に連れられ、初めてデミアンへ入

った。数度同行したが、その先生が名古屋の大学へ転じた後、一人で続けてきた。

久実のことは、その先生から二、三、聞いてはいたが、彼女自身も多少語った。

久実が、また奥の客の相手をしている間、高井は一人、琥珀色の液体を揺らし眺めつ、グラスを傾けた。やがて久実が戻って来た。

「タカさん！お別れする前に、飲みに来て行ってよ。嵐山の、京子さんと出会ったという所にも行ってみたいわ」

「あ、クミさんの送別会か、二人でやらねばなるまいな」

三月に入って間もなくの金曜日、高井は終業間際に久実からの電話を受けた。予定より早く、昨日店の引継ぎが

終わった。今日から自由の身になった。約束したように、飲みに行こう、と言うのである。「今、何処だ」「みゆーず、よ」

高井は、残務を数分で済まし、みゆーずへ駆けつけた。久実がにこやかに

迎えた。外で会うのは初めてである。バーのママというより、小学校の先生

の雰囲気だ。女は置く場所に依って、感じが違うものだ。

「急に吃驚するじゃないか、ぼくが不在で連絡取れなかったらどうしんだ」

「一人で何処かで飲むつもりだったの」

みゆーずで一時間ばかり談笑し、新

京極裏の酒場へ移動した。高井にとつ

ては島だが、久実は初である。二人は小さなテーブルで向かい合った。

「いい所ね」と、久実はカウンターや周囲のテーブルを見回して言った。

先ずは乾杯だ。

「クミさん、長い間、御苦勞様までした」

「ありがとう、タカさん、ほんとに御世話になりました」

二人は、あらたまつた挨拶を交すと、はっは、ふっふ、と笑い合つた。熱燭も取り寄せ献酬した。久実はよく笑つた。デミアンではそう見られぬ表情である。

「タカさん、いつも此処で、お好きな独酌を楽しんでいたのね、ほろ酔い気分になつてから、デミアンか。男つて、いいなあ……」

「あたし、男に生まれたかつた」
デミアンの共通に知っている客たちの噂話し、彼女の京暮らしのあれこれ、生まれ育つた名古屋の事など、話題は尽きず、十時を過ぎた。

久実は、来週には、帰郷する。その前に嵐山へ行きたい、という。高井は、明後日の日曜日を告げた。久実は、喜んだ。午後二時、みゆーずで会う事になつた。

四条河原町で、京都駅近くのアパートへ帰る久実をタクシーへ乗せ、見送つた後、高井は別の居酒屋へ梯子した。

高井は三十分前にみゆーずへ入つた。やがて久実が来た。高井は、ほうつ、と目をみはつた。和服の久実が歩

み寄り高井の前に腰かけ、につこりとした。

高井はまじまじと見た。

「何よ、そんなにじろじろ見て……」

「おどろいたね、全く。美人画から抜け出したようだ」

「あら、あたしも？黒田清輝？」

「そうだなあ」と高井は腕組みし大袈裟に考える仕草をし、

「竹久夢二の『黒船屋』だな」

「まあ、夢二のは、若い娘さんばかりよ、こんな年増では似てもにつかわないわ。でも、どんな画だったかしら……」

「縦長の画面に、大きな尾の長い黒猫を抱いた娘が、黒船屋と屋号の書かれた箱椅子に腰かけている。うつむき加減の愁いを含んだ大きな瞳、たくし上げた豊かな髪に黄色の二本の簪が挿されている。黄色の着丈の長い着物、その裾が小町下駄を履いた素足まで流れている。夢二独特の構図は秀逸だ。大正ロマンの代表的な画だろう。その娘とキミがそっくり、というわけだ」

「嬉しいわ」と久実は笑つた。

その素直さが彼女の魅力のひとつでもある。黄八丈は樺色の市松文様の小紋、波みが深く落ち着きがある。羽織は対象的に藍色の地に桜の花紋が任意に散らされている。長めの黒髪は左右に分けられ後ろへカールされている。その年齢に相応しい着物姿である。

「うん！クミさんの着物姿はいいよ、実にいいよ」

「ありがとう。これ全部母から貰つたの、京子さんの場合と同じね。京都に来て初めて着てみた。今まで特に着る機会がなかったから。でも、京暮らしも終わりだし、タカさんと最初にして最後のあいびきだから、着てみたの」

久実は、笑顔を深めた。逢引き、という古風な言葉が、今の久実の姿に、これまた、よく似合う、と高井は思つた。

高井は、和服の久実に負担を掛けないうように、河原町からタクシーで嵐山へ伴つた。春の盛りの嵐山は快晴のもと大賑わいであつた。渡月橋の北詰めで下車し直ぐに橋を渡つた。行き交う人々と肩もふれあうばかりの人込みである。南詰めで広場に降り、岸を流れて沿って歩き、中程で止まつた。

「京子さん、此処に立っていたのね」
久実は、感慨深げに言つた。高井は、ポケットからハンカチを出し、久実の足元に敷いた。

「あら、あたし、あるの」と、久実は、バックから袱紗を取り出しハンカチの側に広げた。高井はハンカチをポケットへ戻し、手で軽く石の砂を払って直ぐに坐つた。久実も、並んで腰を下ろした。

「京子さん、此処でお母さんの髪を流

してお父さんのところへ送つたのね。京子さんのお気持ちが解かるような気がする」

高井は持参してきた会社の紙袋から、京子の手紙を全部出した。

「あら、京子さんのお手紙」
「ここで全て燃やそうと、思う」
「どうして？」

「そうすることが、供養になるような気がする」
高井は、京子の五通の封筒と、星宮芳枝の二通の封筒からそれぞれの書簡を出した。

「タカさん、それ、あたしに、くださらない？名古屋へ帰つてから、もつと読みたいの、母にも読ませたい」

高井は、書簡の束を久実に渡し、封筒を石の上に重ね、ライターで火をつけた。

小さな送り火は、春の陽光の中へ燃え上がり、まもなく消え、残された灰は、爽やかな川風に吹かれ、広がり、川面に落ち、流れ去つた。流れを追うて視線を上げると、東の方に比叡山が遠望された。その峰は、いわゆる東山三十六峰の山々に連なり、南北に長く美しい稜線を成している。

京子は、便りの中で、優美な比叡の峰を、女性らしい繊細な感性で表現した。

『ゆるやかな峰が降りてきて京の街をやさしく抱えております』



第3弾 原発は悪魔だ

みずからを罰すべし

東南アジアで少数民族を研究していた田中先輩が私に「ある種族では、手の指が欠損している人が多くいたので理由をきくと、親や兄弟が亡くなる」と、忘れない為に切り落とす、と言った。すごいやろ」私は、ほんまかいな、と思ったがよく考えてみると大切な人が亡くなるという大事件の悲しみを心に刻み込むだけでなく、あえて自分の指を切つてまで忘れないようにするという行為は一見野蛮なようであるが、情の深さを考えさせられた。

現代日本で行なわれている臨終から葬送に至る過程において、親族が傍観者のになり医療関係者や葬儀社に任せきりになってしまった状況を見て、何か大事なものを捨ててきたと思うのである。

原発の被害を考える時、他人事のような意識しか持ち得ない自分が齒がゆ

い。大きな声で叫ぶわけでもなく、泣く事もない自分の感性を鈍感だと責める自分が憎い。

もつと感情をあらわに出して、怒り悲しみもがく自分があつてもいいと思う。いやそれがなければ、人間ではないとさえ思えてくる。

京大原子力実験所の小出裕章さんは、神戸で行なった講演で、地震大国である日本で54基もの原発を作つた事情を推察して次のように説明した。

1、 敗戦後、政府は核兵器をすぐ
に作れるように、材料になる核を
保持する必要があつた。

2、 電力会社は法律によって利益
が守られ、会社資産が多くなれば
なるほど利益が多くなるシステム
であつた為に、巨大な資産になる
原発が手っ取り早い金儲けの手段
になつた。

3、 東芝、日立、三菱の巨大企業
は原発を作るための製造工程に多
額の設備投資をして多くの技術者
を張り付かせた為に、毎年原発を
つくる必要があつた。

4、 政治の無策によって疲弊した
地域に原発関係補助金がばら撒か
れ、麻薬のように地域の人々が補
助金無しでは生活出来ないように
してきた。以上

また、早稲田大学の有馬哲夫さんは、
原発が何故日本で多く作られたのか、そ
の訳を、

「原発の父」と呼ばれる正力松太郎は、
独占的な通信網欲しさから原発を日本
に持ち込み、田中角栄は利権目的で原発
を利用した。こうして日本の原発は、そ
の本来の目的とは乖離した、いわば不純
な動機によって増殖を続け、そしていつ
しかそれは誰も止めることができない
ものとなつていた。...

と分析する。

今回の事故で、戦後日本の政治が抱え
てきた多くの問題の深層がだんだんあ
ぶり出されてきた。確かに、国民が知ら
なかつた事も多いが、薄々わかっていた
こともある。おかしいと思ひながらも

「見ざる聞かざる言わざる」と鈍感な
フリをしてきたのも事実である。日本の
上層部の責任は当然としても、われら一
般の者も罪なしとはいえない。政治的無
関心が招いた罪である。ノーと言う勇氣
と気概を持ち得なかつた感性が招いた
結果であると考える。

もう一度、自分の感性を呼び覚まし、
人間関係の情を覚醒させることによつて
己の罪を自覚しそれぞれが自らを罰し、
自分の意思をはっきり言うことなくして
明日の日本は見えてこない。(嘉)

「ゴマメの激しい齒ぎしり」
「ナメるなよ、東電 その3」

「ついでに関電、オマエもだ」の巻

週刊誌の写真を見て、びっくりした。
東電の本社前に、おまわりさんたちが
行列をつくっている。国民の反感を買
っている東電を守っている、と記事に
あつた。そうか、私のように、「東電め、
ナメんなよ!」と思つている輩は日本
中にいっぱいいるのだ。そういえば、
私の母はこの夏、88歳になるが、その
記事の話をしたら、「お母さんも東電に
は、どうでこうで、石のひとつも投げ
てやりたいと思つてた」と言つていた。
「どうでこうで」というのは、静岡弁
で「無茶苦茶に」というような脅し文
句だ。「どうでこうで、えらいめにあわ
せるから」という風に使う。母は生ま
れと育ちが静岡で、怒ると静岡弁が飛
び出す。

その母の故郷の大切な農産物であ
る、お茶の葉からあるうことか、放射
能が検出された。

極端にどうでもいいことだが、静岡
茶は私の大事な「おつかいもの」であ
る。「おつかいもの」という表現、いま
では死語かもしれないが、「手土産」よ
り、もう少し重みというものがある(と
思う)。



初夏の新茶の時期になると、私は「母

が静岡の出で。少しですが、まとめて買
っていますので」とお世話になっている
が、お返しができないような目上の人な
どに、新茶をお渡ししている。感謝の印
つてヤツだ。

当然、親友や仲よくしてくれている友
達にも渡す。そのときは、「これ、いつも
の、お茶」とか「お母さんに飲んでもち
ろ」とか添える言葉はほんざいだが、で
も気持ちのうえで「仲よくしてくれて
アリガトウ！」という気持ちを示す、さ
さやかな年中行事のつもりだ。母もご近
所さん数軒に新茶を配る。家庭菜園の野
菜やなんかをもらう、そのお札に。

だのに……。何でも、風向きで薫科地区
の有機栽培の茶畑に放射能入りの雨が降
り注いだのだそう。怖い。

新茶の時期は5月なので、もう終わっ
ているし、県下全部の茶畑が汚染された
わけでもないが、「ああ、これでも静岡
のお茶です、と言って渡しても『放射能、
大丈夫なのか』

と思われてしまうのだろうか」と考えず
にはいられない。

わかってる。こういうことを書くこ
と自体、自分が大切に思ってきた「静岡
茶」をおとしめることだと。風評被害そ
のものだと。しかし、やはり書かずには
いられない。

「お茶にまで……。東電、どうしてくれ

るんだよ！」

それに福島から静岡の距離も気にな
る。その間に、東京も神奈川もあるのに、
静岡まで？ 原発の災禍は一体、どこま
で広がるのだろうか。これの真の責任者は
一体、誰なのだろう。国か？ 国って誰

なんだ？ わかりやすいから、一応、東
電ということにしているが、東電の誰な
のだ。

震災直後の週刊誌はなぜか捨てられな
い。胸が痛くなるような写真と記事ばか
りだが、そのなかの1枚が目焼きつい
て離れない。小学3年生か4年生ぐらい
の女の子が、透明のビニール袋を頭から
かぶり、衣類など身の周りのものを詰め
込んだ大きな紙袋と自分の靴を持って、

避難所から逃げ出そうとしているところ
で、そばに呆然と立っている大人もやは
りビニール袋をかぶっている。ゴミ捨て
に使う普通のビニール袋で、放射能から
身体を守ってくれるような特殊なもので
も何でもない。

子供にビニール袋をかぶせて窒息しな
いのだろうか、と心配するのも陳腐なほど、
緊迫した状況だということがわかる写真
で、手にもビニールの使い捨て手袋のよ
うなものをつけている。子供の手にはブ
カブカで、よく見えないが、大人が手に
巻いているのは白いビニール袋、こちら
はコンビニの袋か何かのようだ。「漏れ出

した高濃度放射能が少しでも皮膚に付着

しないように」。そのあり合わせの「被爆

対策」が悲しくて、涙が出てくる。防護
服を着ているのも大変だと思いが、防護
服さえない、多くの子供たちやお年寄り
があまりにも無防備で、気の毒で、胸が
痛い。「お茶から放射能が検出され、おつ
かいものにケチがついた」なんてことを
書いていること自体、手前勝手、呑気
で、見識が低いことのように思える、い

ま、生命の危機に福島の人たちはさらさ
れていて、本当の収束がいつなのか、そ
れすら誰にもわからない。

あるとき突然、被爆の恐怖にさらされ、
そのとき身を守るものはビニール袋。も
ちろん、多少は有効なのだと思いたいが、
あまりにも頼りない防衛策だ。

地震の国にある54基の原発に何か不
測の事態が起きたとき、大多数の国民を
守ってくれる、防護体制など、どこもな
いのだ。核シェルターに入れるのは、ど
うせ一部の政治家と経済界の大物とその
家族だけで、そんなとこに入っても、苦
しい時間が長いだけだろうから、私は入
れてもらえなくてもいいけれど、イザと
いうときに、対処できないものなど、人
類は活用してはいけないのだ。

経済界では「停止している原発を早く
動かせ」と信じられないようなことをほ
ざいて、せっつかれたのだろう、バカの
海江田が「こ理解を」なんて言っていた。

多くの国民の安全より、経済なんだ。カ



日本も脱原発へ

3・11から一〇〇日以上が過ぎた。あの魔物は鎮まったのだろうか。国からも東電からも、終熄に向かっているという発表はない。安定した循環冷却システムはまだ構築されていない。深刻な事態に変わりはないのだ。

放射線汚染物質はとめどもなくたれ流されている。海をよごし、大気を、大地をけがしつづけている。そして、子どもたちの未来を蹂躪することにもなりかねない。

「絶対にありえない」と原発推進派の専門家が断言したメルトダウンは起こっていた。圧力容器を溶かし、格納容器を溶かし、土台のコンクリートを溶かし、さらに地中深く溶けた炉心が沈潜していく。やがて地球の裏側、ブラジル沖の大西洋から吹き出るのだろうか。ブラジル・シンドロームだ。

ドイツ政府は原発を順次止めて、二〇二二年までにすべて廃炉にすることを決定した。フクシマの破局的事故を見て、あらためて二〇〇〇年に決定した脱原発政策に立ち返ったわけである。感情的に過ぎるとか、再生エネルギーの整備が不十分だ、電気料金が五パーセントアップするといった批判はあるが、国民の八割以上が脱原発を支

持している。

核廃棄物の輸送や最終処分場選定など原発のもつ危険性をメディアは大きく報道し、原発の問題を取りあげてきた。日本のように、国や電力会社がお題目のように唱える「原発は絶対安全」をそのままたれ流してきたメディアとは大きく異なる。

ドイツ連邦放射線防護庁が一九八〇年から二〇〇三年にかけて原発一六基周辺の調査を行ったところ、五キロ圏内に住む五歳未満の子どもは、ガンや白血病になる割合が通常の倍になるという結果が出ている。原発は存在するだけで、子どもたちをむしばんでいるのだ。フクシマではいま、破壊された原発が大量の放射線汚染物質をまき散らしている。フクシマの子どもたちの命を、未来を奪っているのだ。

ドイツにつづいて脱原発に舵を切ったのはスイスである。寿命を迎える二〇三四年までに原発五基すべてを廃炉にし、改修や新規建設はしない。フクシマがスイスのエネルギー政策を変えたのである。

イタリアでは、原子力発電再開、新規建設などの是非を問う国民投票が六月に行われた。結果は反対票が九割を超え、原発は建設できなくなった。原発推進のベルルスコーニ首相は敗北を認めざるをえなかった。

日本でも国民投票で原発に白黒つけばいいじゃないかという意見もあるが、それは憲法上できない。

ひるがえってこの国の人々は原発にたいしてどのように向き合おうとしているのか。四月の世論調査では、「増設・現状維持」支持が四〇パーセントを超えていた。ところが、六月一、二日に全国で行われた世論調査（日本世論調査会）では、「原発廃炉推進」八二パーセントに達し、「現状維持」一四パーセントであった。日本国民の多くはドイツなみに脱原発支持なのだ。絶対安全といってきた電力会社や国のいうことなんて当てにならない。

国の安全規制なんてものは信頼に値しないということを見抜いてしまったのだ。

イタリアの国民投票や日本の世論調査を受けて、「集団ヒステリー状態」と発言したのは自民党幹事長の石原だ。いまだにコントロールできない、終熄の見通しが立たない、毒をはき続ける原発というものの悪魔性を目の当たりにすれば、脱原発に向かうのはまっとうな向き合い方だろう。この期におよんで、原発にしがみつき、さらに推進しようなどというほうが異常なヒステリーだ。フクシマが、收拾がつかないどころか、危機的な状況にあるのに、「安全が確認できた」といって、定期

点検中の原発の再稼働をお願いしてまわる海江田という大臣はどういう神経の持ち主なのだろうか。

経済アナリストといわれる人種も、原発推進派あるいは現状維持派が多い。原発停止は景気を失速させ経済が停滞する。原発による電力の安定供給が企業の経済活動を下支えしている。そういう意見だ。原発を停止すれば、ほんとうに深刻な電力不足になるのだろうか。

朝日新聞によると、現在営業運転中の原発は一七基で、八月にはそのうち五基が定期検査に入るといふ。つまりいまは三分の一程度の原発しか運転していないのだが、深刻な電力不足にいたっているという話は聞かない。七、八月の夏になれば、電力需要が増えるだろうが、半分以上眠っている火力発電所を稼働させればじゅうぶんまかなえるはずだ。ダムは三割は土砂が埋まって機能が衰えているが、現在の土木技術では浚渫が可能で、ダムを蘇らせることが可能だといふ。

当面は火力、水力をつかい、徐々に太陽熱などの自然エネルギーへ移行するのがいいだろう。

地下に原発をつくらうなどという、とんでもない議論が与野党をこえてつくられたが、顔ぶれを見ると、「日本も核をもちましょう」といいかねないタカ派が多い。お前こそ地下に潜って、二度と出てくるな。（獲）

「菅さん、アンタは頑張らない方が歴史に名を残す？」

明石 幸次郎

昨今の菅内閣をめぐる一連の与野党の不毛、非生産的な争いは、大災害からの国難を乗り越えなければと国会議員たちは二言目には言っていないながら、国民の思いを無視し、一刻も早く震災復興の具体的な法的支援を求めている多くの被災者を、政治全体への不信感、失望感に陥らせています。

菅さんは鳩山さんとの会談で交わしたあいまいな「覚書」で党内の造反者を抑えて、衆議院内閣不信任決議案を辛うじて免れ、延長国会で政権延命となり、ご本人は“一定の目処”が立つまで、少しでも長く政権トップとしてやるつもりなのでしょう。

6月27日夜行われた内閣人事の会見で菅さんは、被災地を回り、被災された人が、暑くなったのに冷蔵庫（翌日の朝刊では被災漁民が使う冷蔵庫とコメントされていた）も買えないと嘆いておられたとの例を出して、そのために、早く2次補正予算などを成立させて法的な処置を採らないといけないと強調していました。冷蔵庫を買い与えることがトップの最重点事のように

強調し、自分は政治家として、ヒューマンで、このような被災者の些細な要望もくみ上げる市民活動家の原点をも、トップに立つても忘れていないと、自己アピールするだけで、我々には何も響いて来ない、テレビの画面からはうつろな印象だけを受けました。勿論、国のトップとしては、被災者の小さい要望にも応えているとの比喻で言ったと思います。震災からこれだけ長い政治的な空白を作り、混乱の後での内閣人事の記者会見であるからには、震災復興、原発事故処理の筋道はこのようにやって行くと言った、もっと分かり易くプレゼンテーションをして、しかも菅さん自らの言葉でアピールして欲しかったと思います。なぜならば、国民の生活を守る、生活第一を政策の最重点課題に掲げて政権交代を実現させた民主党のトップとして、何もかも失った被災者の生活をどう再建させるのか、言葉だけでなく、待ったなしでその実行力と答えを被災者のみならず、民主党を選んだ国民が求めているわけですから。

菅さんは、尊敬している郷里山口の大夫・高杉晋作”のように混迷する時代の魁となり、歴史にその名を残そうと首相の権限と権力を行使し、思いを遂げようとするだけ、結果的には政治的な混乱を招き、何も出来

ず、日本が更なる国力衰退を辿っていく、その切っ掛けとなった凡庸な宰相であったと歴史に残るかもしれない。そうなれば、我々サラリーマンもリタイヤーしてから、70歳になってやっと年金らしきものが貰える侘しい社会になっていることは確実です。

携帯エッセイ 32

同窓会2

同窓生に変わり者がいた。まだ肌寒いのにTシャツを一枚しか着ていなかった。

「寒くないか？」

「慣れているから。年中、Tシャツだけなんだ」

「ええっ！ 冬でも？」

「ああ」

たまたま彼が私の横の席だったので、話し込むことになった。

「いつから？」

「かれこれ三年になる。一日一食にしてから体質が変わってしまったんだ。」

「ええっ！ 一日一食？。それでひも

じくないのか？」

「全然」

「なんでまた一日一食にしたの？」

「朝、家事をして家族を送り出すのに忙しくて食べてる暇がないんだ。昼食

は若い時から食べない。授業中に眠く

ならないように」

授業というのは彼が受け持った授業のことである。

彼は三年前まで教師をしていた。眠気覚ましに昼食を抜くのが習慣だった。

今は年金生活に入っている。

「妻が仕事(教師)をしているので代りに家事を受け持つようになった。朝働きに出る妻と娘のために朝食と弁当を作る。その後、掃除と洗濯をする」

「偉いねえ、一日一食だと食費も安上がりだろ」

「ああ、あくせくすることがない。仙人のような気分だよ」

彼はきつと長生きする、飢餓対策遣伝子が働いているに違いない、と思う。

飢餓対策遣伝子は誰もが持っている。通常は働かない。しかし飢餓状態になると食物を取らなくても生き延びようと作用する。すると人間の加齢速度が遅くなる。つまり普通の人より年を取らない。

私も彼に触発されてダイエットを再開した。昼食を野菜と納豆だけにした。近くの『なか卯』で食べる。ひと月で三キロほど痩せた。

いつか、長生きするために飢餓対策遣伝子を働かせてみたいとも思っている。適正カロリーの三割減で働き出す

そうだ。《龍》

私は幸せだ

人間は自分がしたいことをするために生きてるわけではない。

大人になるといふのは、したいことをするのを諦めるのを学ぶ過程である、という。

もうじき、いろんな花が咲く。誰かにささやきかけるように、長い枝を思い切り伸ばしている。

生きていく……。こうして私も生きていく。私は、今、最高に幸せだ。

そう思わねば罰が当たる、と思った。それほど長いあいだ、その言葉を自分にも人にも言えなかったか。

私は、幸せだ、と口に出して言う。ここしばらく忘れていた或る人にも言った。

いつも肌身はなさず持っていた一枚の紙布を指先で細かく千切った。

手のひらにのせて、ふっと吹けばとんでゆく。

つかの間、幸せだと、またくり返した。

出会い

毎日同じ状態が続いて、何も感動しない、というのではつまらない。

ちよっとしたことには腹を立てたり、笑ったり、私のように八十六年生きてきたら、もう何を見ても、何が起

こつても、

「あつ、そう」

という感じなので、少しも心が躍らないし、血もさわがない。

いかにも年寄り臭くつて私はそれがイヤで、

「何かワクワクすることないかな」

本を読み、新聞に目をそそいでいるので、

「元気ですネ」

といわれるのは、そのせいかも知れない。

毎朝、一人で目覚めると

「昨日は、どこへ、何しに」

と思う生活。ぜいたくなのか、自分にはわからない。

若くても、年寄りでも、男の人に会うとワクワクするかというと、それももう終わった、という感じ。

生きていく、ということとは、人と出会う

つたり、芝居や音楽と出会ったりすること。

出会いは、やはり人生ではとても大事だと思ふし、私は、割合、そういう出会いに恵まれていて幸せ。

「自分にとつても、良かった」と思う。

身にまとうもの

谷垣も小沢も力貸しなさい。苦しんでいる時に、知らぬ顔、大連立は出来ないとか。

きつとその報いは来ると私は信じている。東日本大震災を機に、節電もかねてラジオを聴いているが、音声だけでも重要なことは、きちんと伝えてくれる。被災地向けの応援メッセージは、不安な思いで過している被災者にとっては、励みになると思う。自分たちには何が出来るのか。あるいは、実際にやっている事なども紹介している。

それらを聞いているうちに、身近な事だったら、まず、節電から、普段ラジオを聴いていない人でも、何かやろう、という気持ちが出てくるはず。

防災服をほぼ着用してきた菅首相や枝野長官ら、大半がスーツ姿にかえたこと。

服も持ち出せず、不自由な生活を送る被災者。泥まみれになって活動する

皆さんに対して、スーツ姿はどのように映っただろうか。

母から、よく言われた。畑や田んぼに入るときは、仕事が出来なくても、する、やろう、という気持ちにさせるのは身にまとうもの。

野良着を身につけること、現代、その言葉が身にしみて伝わってくる。何が取り残されているような気がしてならないのだが。

編集後記

商店街の理事会で「脱原発・もんじゅ廃炉」を提案しました。小さな団体から声をあげていかないと原発行政は変わらないと思つたからです。

幸いにも理解ある理事が多く、商店街として「脱原発、敦賀のもんじゅを廃炉にする為に、節電しよう」という議決をしました。

身近な婦人会、老人会、自治会などで脱原発、もんじゅ廃炉をすすめる提案をして、少しでも放射能汚染の不安を少なくするように頑張りました。



芥川商店街歳時記

中元大売り出し

7月1日～10日

A、現金総当り

ガラガラ大抽選

B、景品総当り大抽選

☆

例年恒例の

夜市

7月30日(土) 夕方

いろいろな夜店が

たくさん出ます